

北京語における旧入声

上田 金次郎

Ancient "Ju Shêng" in Peking Mandarin

Kinjiro UEDA

(昭和32年10月22日受理)

目次

まえがき。

I. 古官話における中古漢語の入声。

§ 1. 入声の消滅。

§ 2. 声調変化。

II. 北京語における中古漢語の入声。

§ 1. 古官話におけるその変化との比較。

§ 2. 清音入声の変化。

むすび。

まえがき

本稿は、広韻(1008)と入声のない体系であることをその一大特徴とする中原音韻(1324)および北京語を論述の対象として、中古漢語の入声の「声調」面における変化についての考察を試みるものである。

声調変化という現象は、一般的に云って、語頭子音、韻腹および韻尾などの所謂「音節要素」との緊密な連関作用の上に把握されねばならないものである以上、音節面の変化現象と分離して論ずることは避けるべきであろうが、中古漢語の入声の音節面における変化については、前稿⁽¹⁾にその大要をのべてあるので、ここでは敢て省略する。

漢語において、古くは、所謂「陽声・陰声」と鼎立の対応関係を保ったと解釈される入声⁽²⁾が、一体何時の頃から存在したかは定か⁽³⁾でなく、また、それを含む四声の体系が何時頃備わったかと云うことも、遠には断じがたいことである。

平上去入の古四声の体系が備わった時期が、六朝の頃⁽⁴⁾であったか否か、又は、それ以前・魏晉の頃⁽⁵⁾であったか否か等についてはここでは触れないが、この系譜は、後の広韻のそれにかなりはつきりと継承されていると見るべきであろう。広韻は、十一世紀の初頭、北宋の戚倫らが勅命を奉じて、唐代の切韻系統の諸韻書を集大成した韻書であり、切韻は、その序文に「…因論南北是非、古今通塞、欲更摭選精切、除削疏緩…」(句読点筆者、以下引用文の句読点も同じ)と述べていることから明らかな如く、それは六朝諸韻書の集大成であるからである。

この広韻は、その206韻の配列の中に、「…泊乎魏晉、上声入声多転而为去声、平声多転为仄声…」⁽⁷⁾(圈点筆者)との如き判断を裏付けるような痕跡を止めながらも、その声調体系における示差的成分としての入声の特質を極めて明白に示している。すなはち、その三種の入声韻は、三種の有尾韻とそれぞれ明確に対応しているのである。

ところが、これを今日の漢語諸方言の姿と比較するならば、以来今日までの長い年月の流れの中に、幾多の変遷があったことが明らかになる。周知の通り⁽⁸⁾、入声はその後、

1). 旧来の特質をそのままに保存する過程。

2). 一種の有尾韻〔n〕に対応する一種の促音〔ʔ〕に変化する過程。

3). 韻尾を失って他の声調に変化吸収される過程。

の如き変化過程を辿って今日に及んでいるが、この中、特に第三の現象の興り、換言すれば、北京語に入声がないという特徴的事実の来源が、かなり早い時期にあると見ることに異論がなく、それは今日では、宋末元初の頃と考えられている。これは、ただでさえ流動しやすい言語というものの性格を、北京地方の特記すべき歴史的背景の中に捉えれば、左程の躊躇を要さずに認め得るであろう。つまり、中世以来、異族の強い支配をうけた北京地方の歴史的背景の中に、漢語の変遷の大きな動因を求めるわけである。

936年には、北京は契丹の南都に定められ、1260年から約百年間は元のフビライの首府でもあった。(960年から1138年までの間は、開封が北宋の首府になっていたが、この頃、追われて北から南へ逃げた人の言葉に促音がないという記録もある。⁽⁹⁾) 金の朝廷も北京を燕京と称していたし、さらに、南京から遷都された1421年以来、北京は清末までひきつづき入関した異族の首都王府として栄えていたのである。これらの歴史的事実とそれによって招来された政治的環境が、言語の体系の変化と、言語の統一化に重要な役割を果たしたことは察するに難くない。中唐・晩唐以来の口語的表現の普及、宋の語録や元の勅令に示される文体の変化、あるいはまた、宋の詞や曲の流行等々がこのことの一部を物語っている。

周德清の「中原音韻」はこれを相当明瞭に裏書きするものであり、その序文に「…欲作樂府，必正言語，欲正言語，必宗中原之音…」とある「中原の音」が、北宋以来、かなり広範囲に亘って行われた共通語であることも論証されている。⁽¹⁰⁾ この音系を北京語のそれと比較すれば、それらは非常に近似した体系をもつものであると見ることができ、中でも、入声の変化状況から云えば、北京語は中原音韻の後裔であろうとさえ指摘しう程の近似性をもっている。

小稿は、旧入声の声調面の変化を跡づけようとするものであるが、これを広韻、中原音韻、および北京語の過程で考察することは決してここにはじまる試みではない。⁽¹¹⁾ 古き課題を再び繰返して述べようとする理由は、旧稿の不足を残された他の一面からの考察で補なおうするためばかりでなく、この過程に見られる旧入声の変化とその存在が、北京語から標準語⁽¹²⁾への過程に興味ある問題を投げかけていると考えるからである。漢語が規範化されてゆく場合、最も大きな振幅で動揺するものは、旧入声(北京語における)であり、そこに生じている一連の「又音」であるということを前提として、この問題にもふれたい。

ここに用いた韻書・字典および主な参考文献を挙げれば、次のとおりである。

1. 広韻校本。周祖謨。1951年版。
2. 中原音韻。嘯余韻本と陳乃乾題小字本。(例挙字は、便宜上、日本における通用字体を採用)
3. 国音常用字彙。1935年版。
4. 中原音韻研究。趙蔭棠。1936年版。
5. 釈中原音韻。陸志章。燕京学報31。
6. 関中入声變統的原因和程序。陸志章。国季刊6の1。
7. 北音入声演變攷。白濂洲。女子大学学術季刊2の2。
8. 中国語音韻論。藤堂明保。1957年版。

〔註〕

1. 日本中国語学研究会機関誌「中国語学」。No. 52 & No. 53. 1956年7月・8月。〈中古漢語入声の変遷と北京語の破音現象〉。
2. 上古漢語入声の存否については、宋に興り、明・清に栄えた諸古音学説に明らかにされている。代表的なものとしては、孔広森「詩声類」は、古入声の存在を認めていない。王念孫「王石矚先生遺文」は、部分的に去・入声の存在を認めている。段玉裁「六書音韻表」は、去声は魏晋の頃からであるが、平上入三声は昔から存在していた旨をのべている。
3. 陳第：毛詩古音考，顧炎武：音論，段玉裁：六書音韻表，江有誥：音楽十書，等の諸説がある。
4. 梁書十三卷，沈約伝に「六朝の文人沈約が四声を作った」ことが記録されている。

5. 段玉裁：六書音韻表一，古四声。
6. 切韻の韻目は193韻，広韻は206韻であるが，この韻目の違いは分類の精粗にあり，体系的には同一と見るべきであろう。
7. 5に同じ。P, 19.
8. 王力：中国音韻学・中国言語学概論，胡適：胡適文存3の2「入声考」P. 311，白滌洲：北音入声演變考，等々。白氏はつぎのように述べている。「…一是保存着原来的面目，如現在閩広語の入声。二是把三個声尾變成一個只附声門阻的“ʔ”，如現在的江浙の入声。三是声尾完全消失，分別轉到各声調中去，如現在北京語…」
9. 南宋の陶宗儀「輟耕記」にもある。
10. 「中国語学」No. 51, 1956年6月。藤堂明保。「民族共通語—北京語」P. 5.
11. 上掲諸参考文献。
12. 1955年，漢語規範化問題にかんする討議以来の定義にしたがう。すなはち，規範化された民族共通語を意味する。王力：論漢族標準語，中国語文24期。
13. 新中国になってから刊行された各版本を採らない理由は，むすびの註。5を参照。

I. 古官話における中古漢語の入声

§ 1. 入声の消滅

中古漢語を代表する資料として採った「広韻」は，その206韻の配列からも明らかな如く，入声韻 /~k, ~t, ~p/ (34韻) が，平・上・去三声の有尾韻 /~ŋ, ~n, ~m/ とそれぞれ整然とした対応関係をもつ四声の体系を構成している。しかし，古官話を代表する資料として採った周德清の中原音韻は，当時の言葉がすでに広韻の音とは全く異ったものになってしまっていたことを明らかにしている。著者はその序文において，元朝の統一になって以来，日すでに久しく，言葉はまさに四海同音になっていると指摘した後に，「…上自縉紳講論治道，及国語翻譯，国学教授言語，下至訟庭理民，莫非中原之音。不爾，止依広韻呼吸，如此呼吸，非歛舌而何。…」と論じている。この四海同音という言葉の中に，当時の共通語とも云うべきものが相当広い地域に行われていたであろうと見ることが出来ようし，広韻の音を歛舌の音ときめつけ，それを堅持する者を「南蛮歛舌の徒」と謗っているところから，語音がすでに似ても似つかぬものになっていたことを知ることが出来る。

この著作の主目的が詞曲押韻の規準を明らかにすることにあつたのは事実であるが，「南蛮歛舌の徒」をして，その喉舌を転じさせ，齒牙を換えさせようとした旺んな意図から見れば，これをもって当時の標準韻書にしようとしたことも否めない。斯くして中原音韻は陰平・陽平・上声・去声の新しい四声調の体系を構成し，中古に至るまで有尾韻と整然とした対応関係を保っていた入声を，その陽平・上声・去声⁽¹⁾の中にそれぞれ吸収してしまったのである。

しかし，上記の如く激しい意気を示した周氏にして，なお次のような断り書きをつけていることは注意するに値する重要な問題を含んでいると考える。すなはち，「…入声作三声者，広其押韻，為作詞而設耳。毋以此為比，当以呼吸言語，還有入聲之別，而辨可也。…」⁽²⁾との口吻である。事実，中古漢語の入声が，古官話においては「失入方言」への趨勢をおびながら，その十九韻四声調の新体系の中の「支思，齊微，魚模，皆来，蕭豪，歌戈，家麻，車遮，尤侯」の九韻の平・上・去三声に吸収されているとは云うものの，その九韻への変化において，一部ではあるが，蕭豪韻と歌戈韻，尤侯韻と車遮韻，皆来韻と車遮韻などに所謂「失入方言」と所謂「存入方言」の対立と考えられる分裂現象をおこしていることは，この口吻を如実にあらわしてはいないであろうか。これは，旧入声に対する当時の人々の「潜在意識」の現われを示すものに他ならないと考えられるので，前稿においては，これを異種の官話方言系の存在と，韻尾消失過程における変化現象の遅速の差を示す証左であろうと解釈したが⁽³⁾，声調体系としては入声を失った四声であることに贅言を要さない⁽⁴⁾。

このことから，遠く唐代⁽⁵⁾においても屢々対応の混乱を生じていた入声は，五代を経て，いよいよ，その混乱の度を増し，元代に至って遂に旧体系の崩壊を必然的ならしむような状態になっ

ていたと判断される。

§ 2. 声調変化

上記の如く、中古漢語の入声は、元代に至り、従来の韻尾を消失してしまうまでの大勢になり、中原音韻の「九韻」の平声・上声・去声に吸収された。その変化・吸収の状況は韻目別に見ればつぎの如く整理することができる。⁽⁶⁾すなはち、支思韻3，齊微韻160，魚模韻121，皆来韻53，蕭豪韻99，歌戈韻76，家麻韻68，車遮韻132，尤侯韻10，である。

今、このように古官話に吸収された中古漢語の入声を守温の三十六字母によって分類すれば、次のようになるであろう。

見母平声：開

上声：国，誣棘戟急汲給訖，吉擊激，谷穀穀骨，菊鞠，骼革隔恪擱，郭閣各，角覚桷，脚，葛割鶴閣蛤聒括，甲胛夾刮，劫頰缺莢蕨，結潔决決訣讖缺

溪母上声：隄乞泣喫，哭窟酷曲屈，刻，客，廓，渴瘠闊，恰恰，客，怯闕，挈篋缺闕

群母平声：及極，局，傑竭謁斂掇

上声：局

去声：錫

疑母上声：兀

去声：逆劇，獄玉，額輻客，萼鶚鶚愕，岳樂，虐瘧，萼鶚鶚鄂，岳樂，虐瘧，額，臬藥業鄴月軌別，嚙

端母上声：德得，的酌嫡滴，督篤，掇，荅搭嗒踏

透母平声：透，撻踏

上声：剔踢，禿，託拓橐魄鈍柁，塔獺榻塌，鉄鑿帖貼

定母平声：荻狄敵笛籟，独讀讀讀讀毒突燾，鐸度奪，鐸度奪，達沓，暈迭牒喋喋牒垓絰凸蝶跌

上声：脫

泥母去声：訥，諾，諾，納衲，捏

知母上声：竹，築竹，摘謫，卓琢，劓，輟

徹母上声：勅勅，黠畜，撤

澄母平声：軸逐，直值姪秩擲，逐軸，宅沢扱，濁濯濁擢，着，濁濯濁，著

上声：轍澈

娘母去声：撈，聶蹶鐸

幫母平声：博

上声：北，畢蹕必羣壁壁，卜不，伯百栢迫孽孽，剝駁，鉢撥粕，八，饜饜

滂母上声：匹僻僻劈，撲，拍珀魄，鑿潑瞥瞥

並母平声：僕，白帛舶，薄箔白，魅薄箔勃泊渤跋，拔，別

上声：甞，暴，跋，別

明母上声：抹

去声：滅蔑蔑，抹，幕末沫莫寞，末莫漠幕寞沫，麦貌陌驀脉，木沐没鶩，墨，密，覓蜜

非母平声：逼

上声：筆碧，福幅蝠腹覆，法發髮

敷母上声：扌

奉母平声：復伏服鵬，縛，縛仏，乏伐筏罰

上声：復

微母去声：穆睦牧目物勿，襪

精母平声：族簇

上声：啣稷積績跡背脚，卒，足蹙，則，柞作繫，雀爵，哂匝，節接楫癖

清母上声：七戚漆刺，簇促，錯造，鵲趙，撮，切竊妾沓

從母平声：賊，疾嫉葺集寂，鑿，鑿，雜捷截隄絕

心母上声：塞，宿，昔，惜錫息淅，藪速，粟宿，索搽，削，颯薩鞞，撒，屑薛緹泄媵喪燮屨沓雪

斜母平声：夕習席襲，俗統，葺

照母上声：燭粥，質隻炙織臈汁只，燭粥，責憤側窄仄畏贛迓，捉，斫酌繳灼，扎，拙摺摺折浙哲

穿母上声：尺赤叱，出触，策册柵測，綽焯，察插錘笈，掣掣

牀母平声：寔射食蝕，贖述秫術朮，折舌，

上声：失室

審母上声：洪瑟，識適拭軾飾积湿爽，縮謾，叔菽束，色牆索，朔稍棚，爍爍爍，殺髮，設抵灑說

禪母平声：熟，十什石拾，属淑蜀孰熟塾，芍杓，杓，涉

影母上声：一，屋沃

去声：一，邑憶，益乙揖，郁，厄，惡約，惡翌，約，压押揖，謁

曉母上声：黑，吸翁，笏忽，嚇，壑熇，諛，暗，血歇嚇蝎

匣母平声：惑効，鴿鶴斜榭，画劃，鶴涸鑊，学鷲，合盒鶴，盍活鑊学，滑猾狎轄鑄峽洽匣恰，俠
協穴俠挾纈

上声：檄覘

喻母去声：逸易訳馭溢液腋掖疫役佾泆射翊翼，欲浴育鴿，葉躍鑰淪，葉躍鑰，輝越鉞樾越，拽
噓葉悅說閱

来母去声：六，力栗勒肋，立粒笠曆歷歷歷歷歷，祿鹿漉麓，錄籙綠醜陸戮律，落絡烙酪樂珞，

略掠，落洛絡酪樂烙，略掠，臘蠟籙拉糲辣，裂洌獵齧列劣

日母去声：肉褥，日入，零褥入，弱弱箬，若弱弱，熱爽

したがって、これから次の如き統計を得ることができよう。すなはち：

(表1)

字母	声調				字母	声調			
	平	上	去	(計)		平	上	去	(計)
見	1	52	0	53	牽	12	1	0	13
溪	0	24	0	24	微	0	0	7	7
群	8	1	1	10	精	2	22	0	24
疑	0	1	32	33	清	0	15	0	15
端	0	13	0	13	從	13	0	0	13
透	3	17	0	20	心	0	28	0	28
定	32	1	0	33	斜	7	0	0	7
泥	0	0	6	6	照	0	35	0	35
知	0	9	0	9	穿	0	17	0	17
徹	0	5	0	5	牀	11	2	0	13
澄	21	2	0	23	審	0	30	1	31
娘	0	0	4	4	禪	15	0	0	15
羣	1	23	0	24	影	0	3	17	20
滂	0	12	0	12	曉	0	14	0	14
並	16	4	0	20	匣	35	2	0	37
明	0	1	28	29	喻	0	0	38	38
非	1	10	0	11	来	0	0	54	54
敷	0	1	0	1	日	0	0	15	15
					(計)	178	341	203	722
					百分率	25%弱	47%強	28%強	100%

この表1を通覧して云いうことは、中古漢語の入声が、古官話に吸収される過程においては、上声に変化する傾向が最も顕著に示されているということである。今、これを更に整理すれば、概ね次の如く指摘できる。すなはち、

a：群定澄並奉徒斜牀禪匣の十字母に属す中古漢語の入声は、古官話において陽平に変化している。

b：見溪端透知徹幫滂非敷精清心照穿審曉の十七字母に属す中古漢語の入声は、古官話において上声に変化している。

c：疑泥娘明微影喻来日の九字母に属す中古漢語の入声は、古官話に於て去声に変化している。このことから、結局、

I：古官話においては、中古漢語の清音（無気・有気の無声子音）入声は、影母類を除き上声に変化している。

II：古官話においては、中古漢語の全濁音（有声破裂音）入声は、陽平に変化している。

III：古官話においては、中古漢語の次濁音（有声非破裂音）入声は、影母類とともに去声に変化している。

との如く、その変化現象を解釈することができる。この結論については、白氏も前掲の論攷において、類似した統計からこれと同一の事実を指摘しておられることを附記しておかねばならないが、これと同時に、小稿が、「影」母を如何に解釈したかということについても一言簡単にふれておきたい。すなはち、この影母の変化傾向を単なる例外現象と見ることは出来ないと考えるがためである。

今、中原音韻の去声に吸収された影母入声について、二三の例を示せば、つぎのようになる。

齊微韻 / jI / （※ 音値は前掲拙稿Iを参照。）

影母：益一乙邑憶揖

疑母：鷓逆

喻母：逸易娒訳馱溢鎰液腋疫掖役佚侷射翊翼

魚模韻 / jWI /

影母：郁

疑母：玉獄

喻母：欲浴育鴿

皆來韻 / •aj /

影母：厄

疑母：頽峇鞞

蕭豪韻 / jaw /

影母：約

疑母：岳樂

喻母：葉躍鑰滄

/ aw /

影母：惡

疑母：鸚鵒鰐愕

歌戈韻 / jo /

影母：約

疑母：岳樂

喻母：葉躍滄

/ •o /

影母：惡聖

疑母：萼鸚鵒鄂

本来、全清音である影母の語頭子音は、無気無声の喉音、つまり、無気無声の破裂音 /•/ でなければならないが、上の諸例は、この /•/ が疑母の /•, j/ および喻母の /j/ との間に混同を生じていたことを明らかに示している。従って、小稿は、この影母類が次濁音の変化に随った理由

を、当時すでにそれが同声母系（喉牙音）の次濁音である疑・喻母に同化される傾向にあり、相互の声母差を殆んど失ってしまっていたためであると解釈する。因に、今日の北京語においては、影・喻母の語頭子音区別は全く見られない。

〔註〕

1. 中原音韻齊微韻入声作平声の項に「陽後同」の附註がある。このことから、旧入声は古官話では陰平に変化していないと判断できる。
2. 周德清。中原音韻正語作詞起例。
3. 入声の混乱は、唐代の詩や韻文にすでに見うけられる。今、一例を胡曾の詩に採る。（全唐詩十二函八冊、謹註2）
呼十却為石，喚針將作真，
忽然雲雨至，綫道是天因，
4. 北平音系十三韻，魏建功氏序文（P. 12—13）
5. 蕭豪韻・歌戈韻の兩韻に重出する「媿，匿，措」を含め、広韻で反切のとれない「滌，麵，縹，戩，跣」等を除外して、総数722字を対象とする。
6. 疑母には、この他、娘母と混同するものに / n / が考えられ、独立するものに / ŋ / がある。
7. 中国語音韻論。藤堂明保。P. 161—163 では、今日の北京語平声における影喻母の差異を陰平・陽平の声調差をもって説明している。しかし、これにもやはり例外が存在する。以下は、広韻各韻の先頭字である。影母：於²（魚，央居切）泓²（耕，烏宏切），熅²（文，於云切），榮²（清，於管切）。喻母：庸¹（鐘，余封切，鶯⁴（宵，于嬌切）

II. 北京語における中古漢語の入声

§ 1. 古官話におけるその変化との比較

上迷の如く、中古漢語の入声は、各声母の性格に応じてそれぞれ古官話の陽平・上声・去声に収められる変化を起したが、北京語では、これはどのようにになっているであろうか、以下の諸条件に基づいてこれを述べる。

1. 前項に用いた中古漢語入声字の中、諸韻に重出するものおよび字典⁽¹⁾に収録されていない髒髒峇峇造趙疝瘻など計72字を削り、650字のみを対象とする。

2. 文語音・口語音の二系統を設ける。

3. 文・口語音の別のないものは両方の系統に入れる。

4. 音綴構造を同じくするも、声調の異なるものは、1の場合においても削除していないが、同一字で多岐にわたる声調を持つ場合は、その中の特殊な声調は除外する。

このような条件にもとづいて、北京語における中古漢語の入声の変化・混入の状況を見れば、前項同様、三十六字母による分類から、次のような統計を得る。

(表2)

調 字母	口 語 系				計	文 語 系			
	陰 平	陽 平	上 声	去 声		陰 平	陽 平	上 声	去 声
見	10	29	10	3	52	10	32	8	2
溪	5	3	2	11	21	5	3	2	11
群	1	7	0	0	8	1	7	0	0
疑	0	1	0	23	24	0	1	0	23
端	4	3	1	5	13	4	4	0	5
透	7	2	2	8	19	5	2	2	10
定	2	22	1	7	32	2	22	0	8
泥	0	0	0	5	5	0	0	0	5
知	1	6	0	1	8	0	6	0	2
徹	0	0	0	5	5	0	0	0	5

調 字母	口 語 系				計	文 語 系			
	陰 平	陽 平	上 声	去 声		陰 平	陽 平	上 声	去 声
澄	1	13	0	4	18	0	13	0	5
娘	0	0	0	5	5	0	0	0	5
幫	10	3	5	9	27	8	6	1	12
滂	6	0	2	5	13	6	0	1	6
並	0	8	0	6	14	0	8	0	6
明	1	0	0	22	23	0	0	0	23
非	2	3	0	4	9	1	3	0	5
敷	0	1	0	0	1	0	1	0	1
奉	0	9	0	0	9	0	9	0	0
微	0	0	0	7	7	0	0	0	7
精	6	11	1	5	23	6	11	0	6
清	2	0	0	11	13	2	0	0	11
從	0	9	0	3	12	0	7	0	5
心	5	4	4	13	26	5	4	4	13
斜	1	4	0	1	6	1	4	0	1
照	5	13	2	9	29	4	13	1	11
穿	1	4	2	10	17	1	4	1	11
牀	1	7	0	5	13	1	7	0	5
審	5	3	1	22	31	5	3	0	23
禪	1	11	0	1	13	0	12	0	1
影	6	0	1	10	17	6	0	1	10
曉	7	0	2	5	14	7	0	1	6
匣	0	19	1	13	33	0	18	1	14
喻	0	0	0	32	32	0	0	0	32
来	2	0	0	45	47	1	0	0	46
日	0	0	0	11	11	0	0	0	11
(計)	92	194	37	327	650	80	199	24	347

この表2を、古官話における旧入声の混入状況を示す表1と比較すれば、

1. 古官話において見られなかった現象である陰平への変化が、北京語においては微少なながらも起っている。
2. 古官話においては、旧入声は上声に変化する傾向が最も優勢であったが、北京語においては、これは極めて少くなっており、却って、去声に変化する傾向が最も強くなっている。
3. 北京語における旧入声の去声への変化は、口語系より、文語系の方により顕著に現われている。

と見ることができる故に、結局、北京語の「文・口」系に多少の相違はあるにもせよ、全般的には、古官話と北京語の旧入声のうけ入れかたには非常に異なるものがあるとの仮説が立てられる。今表2の示すところを前項と同様に処理すれば、概ねつぎのようになるであろう。

A) 口語系

- i) 見群定知澄敷奉從斜牀禪匣の十二字母に属すものは、主に陽平に変化している。
- ii) 溪疑泥徹娘明微清心穿審影喻来日の十五字母に属すものは、主に去声に変化している。
- iii) 端透幫滂並非精曉照の九字母に属すものは、非常に混乱した状況を呈している。

B) 文語系

- i) 見群定知澄敷奉從斜牀禪匣の十二字母に属すものは、主に陽平に変化している。

ii) 溪疑透泥徹娘明微清心穿審影喻来日の十六字母に属すものは、主に去声に変化している。

iii) 端幫滂並非精照曉の八字母に属すものは、非常に混乱した状況を呈している。

ここに類別・表示された事実から、旧入声は、北京語においては(文・口系を通じ)、

- 一 全濁類は主に陽平に変化している。
- 二 次濁類は主に去声に変化している。
- 三 全清・次清両類は、陰平・陽平・上声・去声に混入している。

と結論づけることが出来るから、従って、上に概観した如き古官話と北京語における中古漢声語の入の変化傾向の相違は、実は清音字母に属す入声の変化のしかたの相違にあるということに帰結しうるのであろう。

この両者の変化現象を図示すれば、下のようになる。

		全 清	次 清	次 濁	全 濁
入	古官話	上 声		去 声	陽 平
声	北京語	各声に分入		去 声	陽 平

§ 2. 清音入声の変化

上述の如く、旧入声の古官話における変化と、その北京語におけるそれとの差異が、清音入声の変化過程にあるとするならば、中古漢語の入声は古官話への変化過程において、最も優勢を示した上声への変化傾向が、北京語においては、却って、極めてわずかしか起っていないと同時に、去声への変化傾向が最も強く示されているという現象は、いうまでもなく、この中に説明されなければならない。次にこれらについてのべるが、影母類は前節と同様に、これを清音類から除外する。

前掲表2から、影母を除くその他の清音入声の、北京語における変化・混入の状況を要約すれば、次表(表3・表4)の如く示しうる。すなはち、

A) 口語系(表3)

声調 \ 字母	見	溪	端	透	知	徹	幫	滂	非	敷	精	清	心	照	穿	審	曉	計
陰	10	5	4	7	1	0	10	6	2	0	6	2	5	5	1	5	7	76
陽	29	3	3	2	6	0	3	0	3	1	11	0	4	13	4	3	0	85
上	10	2	1	2	0	0	5	2	0	0	1	0	4	2	2	1	2	34
去	3	11	5	8	1	5	9	5	4	0	5	11	13	9	10	22	5	126

B) 文語系(表4)

声調 \ 字母	見	溪	端	透	知	徹	幫	滂	非	敷	精	清	心	照	穿	審	曉	計
陰	10	5	4	5	0	0	8	6	1	0	6	2	5	4	1	5	7	69
陽	32	3	4	2	6	0	6	0	3	1	11	0	4	13	4	3	0	92
上	8	2	0	2	0	0	1	1	0	0	0	0	4	1	1	0	1	21
去	2	11	5	10	2	5	12	6	5	0	6	11	13	11	11	23	6	139

今、この表3, 表4を、全清, 次清の別に更に細分すれば、次の各表に分けることができる。

A') 口語系全清(表5)

声調 \ 字母	見	端	知	幫	非	精	心	照	審	曉	計	百分率
陰	10	4	1	10	2	6	5	5	5	7	55	約23%
陽	29	3	6	3	3	11	4	13	3	0	75	〃33
上	10	1	0	5	0	1	4	2	1	2	26	〃11
去	3	5	1	9	4	5	13	9	22	5	76	〃33

A") 口語系次清(表6)

声調 \ 字母	溪	透	徹	滂	敷	清	穿	計	百分率
陰	5	7	0	6	0	2	1	21	約24%
陽	3	2	0	0	1	0	4	10	〃11
上	2	2	0	2	0	0	2	8	〃9
去	11	8	5	5	0	11	10	50	〃56

B') 文語系全清(表7)

声調 \ 字母	見	端	知	幫	非	精	心	照	審	曉	計	百分率
陰	10	4	0	8	1	6	5	4	5	7	50	約21%
陽	32	4	6	6	3	11	4	13	3	0	82	〃36
上	8	0	0	1	0	0	4	1	0	1	15	〃6
去	2	5	2	12	5	6	13	11	23	6	85	〃37

B") 文語系次清(表8)

声調 \ 字母	溪	透	徹	滂	敷	清	穿	計	百分率
陰	5	5	0	6	0	2	1	19	約21%
陽	3	2	0	0	1	0	4	10	〃12
上	2	2	0	1	0	0	1	6	〃7
去	11	10	5	6	0	11	11	54	〃60

これらの諸表に示されるものが、古官話において上声に最も強く変化する傾向にあった中古漢語の清音入声の、北京語における変化状況である以上、その清音入声が主として上声へ変化するという傾向が弱くなっているということについては、喋々するまでもなく納得できるであろう。而も、上掲の各表を全般的に見れば、そこには、中古漢語の清音入声は、北京語においては主として去声に変化していることが明らかに示されており、就中、この傾向は口語系におけるその変化状況よりも、寧ろ文語系のそれに、より一層顕著に物語られているのである。同時にまた、このような全般的趨勢の中から、去声に変化する傾向が、両系を通じて次清音類により強く現われているという現象、および、全清音類においては、両系ともに、陽平に変化する傾向が去声に変化するそれと略々同等なものとして示されている事実なども容易に見出すことができる。

ここに、北京語における旧入声について、白滌洲氏が「無気の破裂・破擦子音をもつ清音入声は陽平に変化し、有気の破裂・破擦子音をもつ清音入声は去声に変化する⁽²⁾」と結論する根拠、および羅常培氏が「全清群は陽平になり、次清群は去声になる⁽³⁾」と指摘する理由が存在するのであろうと

推察する。しかしながら、この推察するということは、上記の結論が旧入声の北京語における声調変化のすべてを尽すものであると考えるということの意味しているわけではない。ただ、表5と表7、表6と表8に見られる如く、「見知精照」各声母類および「溪徹清心穿審」各声母類の変化状況に、上に指摘されうような現象が強く現われているという理由から、これらの見解をあくまでも全般的な変化傾向に対する概括的な考察の結果としての範囲で納得しうると考えているにすぎない。

私は、この中の去声への変化についてはこれは変化の遅速の差にのみ帰因する現象ではなく、やはり、異種の官話方言の影響によるものであらうと考える。すなはち、中古漢語の清音入声は、古官話では上声に変化しているのであるが、その代表的資料であると考えられる中原音韻には、清音・濁音の区別はなくなっているという事実がある。而してこの事実を古官話においては旧濁音上声が去声に変化しているという現象に関連させて考え、旧清音入声の古官話における上声から北京語における去声への変化を、それが一旦上声に変化したのちに、旧濁音の上声が去声に変化してゆく傾向に影響されて、それと同じような変化を起したものとするよりは、当時すでに北方の一部にはこれらを去声で行う方言が存在したと判断する方が妥当であらう。

一方、北京語における旧清音入声が、その陰平・陽平・上声・去声の各声調に分入しているということは周知の事実でもあるから、陰平への変化の中に、何等の規則性を見出すことが不可能であるにもせよ、この歴然たる事実を全く無視してはなるまい。従って、羅氏の如く、これには一言も触れずに前記のような截然たる結論を導いたことに対しては、いささか「割切りすぎた」⁽⁵⁾観がないでもない。(陰平の入声が将来変遷をつづけて、遂には陽平に変化するという見地からの指摘であれば、白氏が「それは去声に変化する」と予言されているのと同列にならう。⁽⁶⁾

この旧入声の北京語の陰平への変化・混入の状況は、附表(折込)の表列に示される如く、甚だ非規則的なものであるが、現象としては陽平へのそれにつぐものであり、表5~表8はその配分をつぎのように示している。

口語系：全清55，次清21，全濁7，次濁3。

文語系：全清50，次清19，全濁5，次濁1。

この配分状況から見れば、濁音入声の陰平への変化現象は極めてわずかしか起きていないと認めることが可能である反面、清音入声の陰平変化が非常に強く示されている。この比率は、文語系・口語系を通じ、ともに約九割を占めている。従って結局、陸志韋氏をして「不明確」⁽⁷⁾とも云わしめたこの特徴的現象である陰平への変化は、「清音入声に圧倒的に強く現われている」と見なければならぬし、しかも、この中、次清音の占める比率がそれ程大きなものでもないという事実から、これはさらに、「全清音入声に主として認められる変化現象である」と指摘することができるであらう。

上記の羅氏の見解が、旧入声の北京語における声調変化の全般的傾向を指示しようとするものであるならば、陰平への変化についても、当然附言されるべきものがなければならぬと考える。しかし、附表を整理することによって明らかとなる陰平の旧清入に、3等韻が殆んど、存在しないこと、および他声——主に陽平と去声——に分入している3等韻とこれを比較すると、そこにはきわだった差異が認められること等についての論及は別の機会をまつこととし、本稿では、唯、如上の考察を附加することに止めたい。この清音入声の陰平への変化については、正しくはやはり「不明白」と云わなければならないかも知れないからである。⁽⁸⁾

(註)

1. 国音常用字彙による。なお、文語音は存入方言、口語音は失入方言であると考えている。(前稿参照)
2. 白滌洲。北音入声演变攷。P. 20,
 - 一、属于塞声和塞擦声的清声不送气各紐，或塞声塞擦声和擦声的濁声各紐的入声字，現在北音読陽平。
 - 二、属于塞声和塞擦声的清声送气各紐或擦声的清紐，或鼻声边声和影响各紐的入声字，現在北音読去声。
3. 羅常培。漢語音韻学導論。1956年。P. 81, 第八表，古今調類分合異同表：「全清全濁變陽平，次清次濁變去声」。

4. 白滌洲氏の考察と幾分異なるが、これらは有気破裂・破擦音である。
5. 羅氏は、上掲論文の同頁で、客家語については「客家語古次濁入声一部分変陰」と註をつけ、分宜方言についても、旧入声が陰平に変化している事実を指摘している。
6. 白滌洲。北音入声演変考。P. 41.
7. 陸志章：國語入声演變小註。燕京學報 34期。
8. 閩広方言の高入・中入・超入などを例にして考えれば、母音の長短・高低・深淺との関係および他方言との接觸による変化の速度の問題等もとりあげねばなるまい。

む す び

音系の面から概観すれば、今日の北京語は、大体のところ「中原音韻」の音系に相当密切に関連しているし、入声韻の音節変化も、古官話における中古漢語の入声の変遷状態をある程度そのままの形で継承していると考えられる。⁽¹⁾そして、そこに当然取上げられるべき今日の北京語における破音の現象の一端も、中世に存在した「存入・失入」方言が近世において文語音・口語音という形をとるようになったあげく、遂に一方の体系の中に併合された結果であると解釈しうる要素を包含している。

ところが、声調変化の面においては、上にも見られる如く、双方においてある程度の差違が存在すると云わねばならない。繰返していうならば、その違いは結局、つぎの二点に絞ることができよう。第一は、清音類の変化現象——陰平への変化の有無——であり、第二には、清音類の変化傾向——主に上声に変化する傾向と主に去声に変化する傾向——である。この中、最も大きな問題を残すと考えられるものは、前者すなはち陰平への変化であろう。

変化現象の原因も不明であり、将来それが如何に変遷するかも不明であるその「陰平に吸収された旧入声」については、白氏は、既述の如く、それが去声に変化してゆくことを予想しておられるが、果してその通りになるか否かは甚だ疑わしい。また、主として陰平に変化する傾向が、概して全清音類に見られるという事実から、それが、やがては「陽平における旧入声と同じくなるであろう」と見ることに躊躇しなければならぬものを感じる。

なぜならば、北京語においては、語頭子音の「清・濁」区分がなくなっているからであり、しかも、この現象のおこりが、すでに久しい昔のことであるからでもある。

わたくしは、清・濁区分がないということから、陰平の入声に見られるような現象が、他の声調に吸収されているものにも起り得ることであると考え。古官話以来、系統としては変動してないと判断することができる今日の北京語における去声・陽平に吸収された入声ですら、今後の変化を必然的ならしむる可能性がないとは云いきれない。

殊に、1950年、スターリンの言語学論文が発表されて以来、非常な勢いで発展しつつある中国言語学界の民族語形成の力が、何をもって標準語とするか、如何なる方言を民族の統一的共通語の基礎にするかという方向に向けられている今日、民族の共通語と方言の関係を規定しようとする背景の前に立つ北京語に、変化がおきないと考えることは、まずできないことであろう。

王力氏が、「標準語とは、民族共通語の基礎の上に、より一層加工され、規範化された民族共通語である」と規定し、「民族共通語は、一定の方言の基礎の上に発展してできるものである。…北京は、元代以来、全国の文化・国家生活の中心であり、北京方言は多くの方言の中から民族共通語に高められたものである」と指摘し、また、「北京語を標準語とすることは、言語の発展の内部的法則と政治経済の条件によって定められる」と述べるが如き、その北京語の標準語としての内的・外的の資格については、今更いうまでもないことである。

かくしてのち、現存する民族共通語（≒普通語）としての北京語に、いよいよ規範化の度が加えられて、その発展過程に生ずる分歧に適当な整理・修正および方向づけが行われれば、(1). 書き言葉の規範化、(2). 放送用語の規範化、(3). 映画および演劇用語の規範化、(4). 言語教育の強化、⁽³⁾な

どの過程で、それが標準とされる北京語の音調にも変化が起るのは当然のことであろう。今、(2). 放送用語の規範化という点にふれて幾つかの変化例をひけば、つぎの如くなる。

閩：〔min ² 〕 → 〔min ³ 〕 (閩江)	撃：〔gi ¹ 〕 → 〔gi ² 〕 (攻撃)
巫：〔ja ³ 〕 → 〔ja ⁴ 〕 (巫歴山大)	即：〔gi ² 〕 → 〔gi ⁴ 〕 (即是)
混：〔hun ⁴ 〕 → 〔hun ³ 〕 (混合麵)	室：〔shɪ ¹ 〕 → 〔shɪ ³ 〕 (研究室)
興：〔hing ⁴ 〕 → 〔hing ¹ 〕 (興高采烈)	複：〔fu ⁴ 〕 → 〔fu ³ 〕 (複雜)
諷：〔fêng ⁴ 〕 → 〔fêng ³ 〕 (諷言)	鬩：〔ai ⁴ 〕 → 〔hai ⁴ 〕 (鬩關)
傣：〔tai ⁴ 〕 → 〔dai ³ 〕 (傣族)	軋：〔ja ⁴ 〕 → 〔zha ² 〕 (軋輓)
僮：〔tung ² 〕 → 〔zhuang ⁴ 〕 (僮族)	暴：〔Pu ⁴ 〕 → 〔Bao ⁴ 〕 (暴露)
弛：〔shɪ ³ 〕 → 〔chi ³ 〕 (緩弛)	
傾：〔kin ³ 〕 → 〔gin ³ 〕 (傾聽)	

これらの数例が示す音調の変化は、(左)の音調から(右)の音調に統一されつつある姿を示すものである。単に声調面(5)のみに限らず、音節面にも変化が起きつつある事実が示されているが、殊に、右のグループが旧入声字であることから判断するならば、これらは、/~k/型入声に多く見うけられる所謂「文語音と口語音による破音現象」(6)が極端に整理・統合されつつあることを示すものであると把握できる。

実際問題として、このような変化がおきていることは、旧入声の変化が、単に清音類においてのみ起りうるだけでなく、濁音類においても起りうることを暗示する例証である。すなはち、それらは今後ますます従来の規則性を失ってゆくに違いない。

上記の数例は、(1). 俗音の採用(自由勝手に愆意的に作られたものでない)、(2). 他方言の影響、(3). 諧声のしからしむるところ、等による変化であると解釈して差支えないであろうが、この中に、(1). 人民大衆の言語に学ぶ、(2). 古人の言葉の中から生命あるものを学ぶ、等の施策の一端も端的に示されているようである。この動因をなすものは、他ならぬ人々の言語生活の発展である。近來、めざましい社会の発展に伴って、人々の生活の社会性・公共性がとみに増大し、より普遍性の高い言語が必要になってきたからに他ならない。ここに、規範化された共通語としての北京語への勢いが、当然のものとして生ずるわけであり、このためにこそ、本来、北京語の中にあつたある種の要素は、失われてゆくべき必然性を約束されることになるのである。列举した幾つかの例は、その典型を示すものであり、整理され得る「又音」を形作るものが、概して保守的な讀書音と一脈あい通ずるものをもつものであることをも暗示している。そして、その音系においては中原音韻のそれに類似すると考えられる北京語に対する標準語への規範化の力が及ぼすところを、曾って、周徳清が広韻の無用を諷ったことに較べれば、双方大いにその事情を異にするとはいうものの、結局そこには言語というものが、常に生活に密着するものであることを痛感せしむるに足るものを宿している。

しかし、このことは、何も中国の場合に限ったことではない。ソビエトの言語改革の実際においても見られるが、われわれ日本人の立場から日本語というものを顧みれば、言語と生活の相関関係は一層具体的に理解しうるに違いない。中国における標準語と北京語の関係は、同時に、標準語と方言の関係であり、これは、日本における標準語と東京語(東京方言)および標準語と各地方言との諸関係におきかえることができるものである。

言語は生活に密着するものであるとの観点に立ち、日本における標準語の形成とその普及の経験に基いて、中国における言語の規範化の問題を概観すれば、北京語を標準語として規範化することが、標準語として規範化された北京語がそのまま普及するというを意味するものではないと見なければならぬであろう。その理由としては、規範化されるに当って加味されるべき「外

的要素」が一定不変ではあり得ないことと、規範化されるべき北京語自体の「自律的内的要素」の変化と発展の可能性とが考えられる。

中国においては、この問題の解決を促進する手段として、現在「表音化」が準備されつつあるとは云え、音調体系を著しく異にする各方言間にこれを浸透させ、普及させることは、容易なことではない。殊に、話し言葉の場合、(書き言葉の普及速度は、話し言葉のそれよりは当然早くなる)規範化された言語の主観的推進がそれ程有効な作用を果し得るとは考えられないから、やはり、一定の普及化政策の上に、さらに、藉すに長い年月をもってしなければなるまい。

しかし、ここに、標準語の推進は容易でないとか、規範化され、表音化された言語が行われにくいと言うことは、「だから、北京語を規範化し、表音化することは無意味だ」ということではない。わたしの云わんとするところは、規範化し、標準化するということが、「より広く行われる言葉をつくる」ことを目標にするものであるならば、どうしても、過渡期としての一段階を想定しなければならないであろうということである。ここに考えられる段階は、すなはち、各方言式の共通語の確立である。中国の標準語形成の過程における最も根本的な問題が、統一的語音の確立にあることは云うまでもない。この標準語を普及させる場合、表音化された標準的書き言葉は比較的容易に普遍性をもちうると考えられるが、一方、長きにわたって培われた各方言のもつ「調型」は、容易に北京語の語音に基く標準的話し言葉の語音・語調に同化され得ないと考えられるからである。

しかも、その間においても、丁度今日の東京語の如く、それ自体「標準語化」の軌道で自転してゆく北京語というものを忘れることはできない。如何に規範化され、如何に普及されるにしても、標準語がその範を北京語の語音の体系にとって昇華されるものである以上、北京語が、そのままある程度の修正を加えられて共通語になると見てしまつてはなるまい。北京語の変化に当っては、外部との交流による所謂外的要素が影響することは勿論だが、やはり、北京語自体のなかにある内部順応的傾向による変化が、より大きな比重を占めることになるであろう。

上記諸例にしても、俗音の採用と解釈される変化の中には、史的・内的必然性をもたないとは云いきれないものを含んでいる。(…室, 複, 闕, 削…)これらに暗示されるものから見れば、現在、北京語の内的変化によって最も大きな振幅で左右されているものは、旧入声であり、またその「又音」、あるいはそれに連なる一連の音調であろう。

従つて、「古官話の上声に変化した中古入声は、その歴史的変遷の遺跡である」⁽⁷⁾との表現をかりるならば、北京語における旧入声は、「入声の声調変化を跡づける一つの混乱した現象の記録であり標準語として規範化される北京語の史の変遷の道標となろう」と指摘できるのではあるまいか。

北京語の自転に対するいわば公転とも云うべき規範化と標準語の問題については、何れ稿を改めて詳しく述べることにしたい。

〔註〕

1. 前掲拙稿Ⅱを参照。
2. 王力. 論漢族標準語. 中国語文. 24期.
3. 同上.
4. 中央人民広播電台の用語による。書簡によって問合せたものと、神奈川県在住の川瀬正三氏 (RP通信社) の提供御教示によるものである。
5. 1953年1月第一版, 1955年8月第十一版の「常用字彙」によれば、より一層又音が整理されているが、幾分、意図的になりすぎた観がある。現状にそぐわない点も多いので、敢て採らない。
6. 前掲拙稿Ⅱ参照。
7. 白焱洲: 北音入声演變考. P. 41.

韻目 声母	緝	合	狎	洽	帖	質	沒	術	物	未	黠	鎋	月	薛	屑	德	職	錫	昔	陌	沃	鐸	葉	覺	屋	表	燭		
見	汲 3	鴿 1	胛 2		鈇莢 3 3					聒 1	割刮 1 2							擊激 4 4											
溪				搯 2					屈 3																哭 1		曲 3	(文語系のみ)	
群													擻 3																
端																		的滴 4 4		督 1									
透					貼 4										發 4			剔踢 4 4			託 1				禿 1				
定										脫 1					跌 4														
知																										摘 2			
澄																								着 3					
幫										鉢撥 1 1	八 2			籠熬 4 4			逼 3	壁槩 4 4							劍 2				
滂										潑鑊 1 1				管擻 4 4				劈 4		拍 2						撲 1			
非													發 3																
精		唯匪 1 1													接廊 4 4			績 4	積 4										
清						七 4									沏 4														
心		撒 1												沏 4		塞 1		浙 4						削 4					
斜																			夕 4										
照														拙 3			織 3		隻 4						捉 2				
穿								出 3																					
牀						失 3																							
審	濕 3										刷殺 2 2				說 3												縮 2		
禪																								杓 3					
影	揖 4		押鴨 2 2			一 4																		約 3		屋 1			
曉	吸翕 3 3						芴忽 1 1						暗歇竭 2 3 3				黑 1												
來		拉 1																											

附表

北京語の陰平に変化した中古の入声

備考・(1)数字は「等」別を示す。(2)正歯音の三等は後に捲舌化する。(3)原則として、唇音の三等は後に合口化する。(4)緝韻は三等韻のみ。